

たなか・ひとしー69年京大法卒、外務省入省。
アジア大洋州局長、外務審議官などを経て現在、
(株)日本総研国際戦略研究所理事長兼(財)
日本国際交流センターシニア・フェロー。63歳。



私には明快な答えがなかった。いずれの論理でも説明がつかない。日本の議院内閣制にお

先日、米国の日本研究者から質問を受けた。なぜ日本ではこれほど短い期間に首相が頻繁に交代するのか。先進国、途上国、民主主義国、専制国家いずれにも例を見ない。統治に対する考え方が違うのではない。首相になること自体が目的化してしまい、首相になって国家をどう導くかは二の次となっているのではない。日本には「国家指導者」について確立した概念がないので、与党、野党とも指導者に従うというより、指導者を引きずり落とすという方向にしのぎを削るといったことになってしまうのではないか。

ウェーブ

2011.1.19

時評 電気新聞

いて衆議院選挙が基本的民意の発露であり、本来であれば、ほぼ4年の次の衆議院議員選挙までの間が首相在任期間であるのが自然である。ところが、2005年小泉政権下での自民党の大勝の後、1回の衆議院議員選挙を挟み、安倍、福田、麻生、鳩山、菅と5人の首相を生んでいる。何故なのだろう。一つの理由が衆参の「ねじれ」

政治家は原点に立ち返れ

にあることは間違いない。ねじれの故に政策を法律の形で通すことが出来ない。したがって政権を投げ出す。しかし「ねじれ」は先進民主主義国では珍しい事例ではない。「ねじれ」が生じると連立を構築するが政策の妥協・修正により政策を通していくのが当然である。米国の中間選挙で民主党が大敗し、下院で共和党が多数を占

めた途端、オバマ大統領は大胆な軌道修正を行い、ブッシュ減税を延長した。日本のように参議院の閣僚に対する「問責決議」を人質に審議拒否を行うといった議会戦術は、国家のために必要な法律を通す、ということより野党が与党を追い込むことが議会の役割であるかのようである。そして、与党

という姿勢を貫いてもらいたい。私が官僚として仕え、結果的に5年という長期にわたり政権を維持した2人の首相―中曽根、小泉両首相―は、いずれも競争を勝ち抜き、苦勞して首相になった人た

は官房長官―中曽根内閣の後藤田官房長官、小泉内閣の福田官房長官―を政策調整の要と考へ日参した。小泉内閣の古川官房副長官(事務)は政と官の橋渡しの役割を担った。

国民に選ばれた政治家は原点に立ち返ってほしい。与党を打倒するだけの目的で選ばれたわけではない。与党実力者を守るために選ばれたわけでもあるまい。国家の繁栄のために国民の負託を受けて選出されているはずである。そして首相は与党党首である前に日本

の首相であることを想起し、国家のためにやるべきことをやること。そして両者に共通するのは巧みな官僚操縦術である。官僚幹部

の制度を壊すのは簡単なことである。「内閣支持率」なるものが政権安定の最大基準と考へられ、「政治主導」が制度なき掛け声となり、権力基盤はいまいとなり、官房長官や副長官の役割も大きく変質した。何も元に戻すべきだといっているわけではない。首相の権力基盤や官僚を使いこなす装置をもう少し緻密に考へてほしい。政策の差異は大きいとは考へられない日本において連立しないし政策的妥協による法律の成立がそれほど困難とは思われない。ましてや官僚を使いこなすことは政治が権威を維持することが出来れば容易なことのはずである。